



TITLE:

讀者欄：寄書歡迎

AUTHOR(S):

---

CITATION:

讀者欄：寄書歡迎. 天界 1935, 15(166): 149-150

ISSUE DATE:

1935-01-25

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/166957>

RIGHT:

讀者欄 寄書 歡迎

六甲星見臺よりの Statement.

京都帝大理學部の山本一清教授の勸告に従ひ、今回神戸市高羽の<sup>ササ</sup>菰部<sup>ベモリ</sup>守子夫人は自邸に星見臺を設けた。

設備としては花山の<sup>キ</sup>木邊<sup>ベシゲマロ</sup>成磨氏作口径30糎（當分26糎半）の反射鏡と、これに附屬する英國レイ氏作15糎屈折鏡との二個の<sup>トツメガネ</sup>遠眼鏡を据え付けた。これは何れも試験的のものであり、遠からず同夫人の所有する英國リンスコット氏作47糎 F 3.8の寫眞鏡をも組立てる筈である。此の星見臺の名譽臺長は山本一清博士、顧問は稻葉、柴田、小山の三理學士である。

京都帝大の花山天文臺は、<sup>ミヅカ</sup>三鷹の東京天文臺と並んで、吾國に於ける代表的の天文臺であり、就中、大型分光器による太陽單光寫眞（<sup>ウエ</sup>上島<sup>ジマ</sup>講師擔任）、二重星觀測（稻葉理學士擔任）及び小遊星の觀測並びに其軌道研究（柴田理學士擔任）に於ては極東に於ける總本山である。然るに京都の地たるや晴天に恵まるゝこと薄きため、何れか他の適當な個所に觀測所を設くべく、山本博士は折角物色中であり、去る十一月と十二月とに北海道と臺灣との兩地に出張所が出來、夫々花山の器械の一部分が移轉された。そして山本博士は更に手近な近畿地方にも二個所位出張所を設くべく六甲山及び生駒山あたりに目星を付けては居るが、其實現には尙ほ日子を要すべく、差向き、一昨年以來太陽黑點觀測を續けて居る菰部夫人に依頼して、花山の一屈折赤道儀移轉の話もあつたが、都合により是は實現の運びに至らず、結局上記の如き器械の据付となつた次第である。因に、京大が今春四月三井物産大阪支

店の手を経て輸入するトムキン氏作60糎東洋第一の大反射望遠鏡も、京都以外の天候良き地に据付くべく、目下山本博士の許に於て適當の地を物色中である。

天文學は非常に深遠な、そして廣汎な學問であり、素養の無い駆け出し者には到底齒が立た無いと一般には信じられてゐるが、其れはしかし近代發展の天體物理學にはあてはまらない。又、天體の研究題目が無盡藏であるのに較べて地球上に於ける觀測者の數はまことに寥々たるものであるが故に天文學者としては到底手が廻りかねるので、アマチュア觀測者達に期待するところが頗る大きいのである。

由來神戸といふところには吾國屈指の素人天體觀測者が多い。中山手通スコフキールド氏が、前回、火星接近の際になしたる觀測は歐米の學者にも重んぜられた。又、小遊星の規則的寫眞觀測をするところは現在世界中では獨逸ハイデルベルヒ天文臺を始め約二十箇所しか無いが、其中の二箇所迄は神戸市内にあると云ふことを知る人は少なからう。大手四丁目の射場保昭氏及び須磨關守町の改發香嶋氏が之れであり、何れも比較的さゝやかなる天體寫眞機を以て、堂々世界各國の天文臺に伍して立派なる撮影觀測をして居ることはまことに偉なりとすべきである。上記高羽<sup>ササベ</sup>の菫部夫人は一昨年以來毎日缺かさず太陽黑點の觀測をして來たに過ぎないが、其目的は黑點の消長と長期の氣象變動との關係を知る術<sup>スベ</sup>にもと思つて始めたのであると云ふ。尙ほ昨春からは、英國グリニヂ航海曆編纂所長コムリ博士の依囑に應じ、月による星の掩蔽觀測を続け、複雑なる「月の運行」研究の資料を提供して居る。(終)

シグマ・サチタリアス

編輯附記 六甲星見臺に新設された望遠鏡に就いては三月號に、木邊成磨氏が精細な紹介解説をされます。――

會員の方で望遠鏡やその他の設備(或は觀測臺)に就いての記事を御寄稿下されば、本欄で御紹介致します。精々、自由に開放された「讀者欄」を御利用下さい。